

発行所

真宗大谷派 光善寺

発行人 太田高顕

茨木市島2丁目3-16

電話 072(632)7107

http://www.eonet.ne.jp/~kouzenzi

いぶき

2019年5月発行

今月の言葉

自力の心とは

すなわち

念仏を疑う

心である

『歎異抄』を読みなおす

阿弥陀仏の本願を信じて、念仏もうすことで、だれもがすぐわれるというのが真宗の教えです。『歎異抄』には、著者唯円が親鸞聖人から直接聞きとられた言葉が生き生きと記されています。

第一章（現代語訳）

弥陀の誓願（誓い）の不思議な力に

おたすけいだいて往生をとげるのだと信じ、念仏をとなえようと思立つ心がおこった時、その時ただちに、その人はすべてを救いとして誰一人として捨てることのないという大恩恵に浴

することができるよう、弥陀はしてくださっているのです。弥陀の本願は、老年少年、善人悪人などの差別を少しもされず、ただ弥陀のはたらきを信ずる心ひとつが肝要とされるのです。

なぜかという、まさに、煩惱が止むことなく、罪深い人間を救おうとされるのが弥陀の本願だからです。本願を信じさえすればよい。そのうえさらに善行を積み重ねる必要はまったくありません。念仏よりもすぐれている善などというものはありえないし、逆に自分が罪を犯さないかと心配することも要らないのです。それは弥陀の本願による救いはたらきを妨げるほどの悪などないからなのです。

かならずあなたをすくうぞという誓いが、お念仏となつています。届いているのです。どうか、お念仏をもうせる人になつてください。

『歎異抄』の二つ

生涯を尽くしても、出会わねばならないただ一人の人がいる。それは私自身。

二縁のあつた先生が、残された言葉です。われわれ人間にとって、一番近いけれども、また一番遠いものが人間であり、

私自身ともいえるのです。悲しいかな、自分の力だけでは人間の正体、自分の正体を知ることにはできない相談なのです。人間が生きているということは、こうした重いなぞをかかえながら歩き続けていくことともいえます。教えという鏡に写しだされて、はじめて自身のありようが知らされるのです。

親鸞聖人は、人間の存在（この身）の事実、縁に遇うことだと教えられます。人間の心（思い）は、いつも自己中心ですから、事実を引き受けることができません。悩み、苦しむのです。ところが、身体はどんなときも悩むことなく、堂々と身を引き受けているのです。

われわれ人間は、自己中心にはからうことの愚かさに気づかされ、現在の事実に戻ることが阿弥陀から願われているのです。『歎異抄』は、この身の事実深くうなずいて生きることが、念仏者の生き方であると教えるのです。

